

日本語における再帰性をもつ他動詞構文についての体系的な研究

李, 静

<https://doi.org/10.15017/2348715>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏名	李 静			
論文名	日本語における再帰性をもつ他動詞構文の体系的研究			
論文調査委員	主査	九州大学大学院芸術工学府	教授	鏑木時彦
	副査	九州大学基幹教育院	教授	大橋浩
	副査	九州大学大学院芸術工学府	准教授	中村美亜
	副査	九州大学大学院芸術工学府	名誉教授	板橋義三

論文審査の結果の要旨

従来、日本語における再帰性の問題は部分的に扱われることがほとんどであり、それぞれの分類の仕方や解釈が複数あり、またその分類や解釈は十分説得力のあるものではなかった。そのため、再帰性の問題は時折棚上げにされ、その全体像の十分な解明の糸口にも至らずに今日まで来ている。

本博士論文は日本語における再帰性の概念の有効性を検証し、再帰性は統語的には他動詞構文の1つと捉えられるが、そこから意味レベルとの関連で全体像の枠組みは何か、その枠組みはどのような要素で形成されているか、また、それぞれの異なった用法との関連はどの要素が絡んでいるのかなどを明らかにした、非常に意欲的、野心的な博士論文である。

本論文は序章から終章まで9つの章からなるが、ここで問題となる第1章から第7章までについて評価を含め解説しておく。

第1章では従来の部分的把握を超越し、全体像を求めることから再帰性についての枠組みとその構文を捉えようとしたものである。このような包括的な枠組みの取り組みは本稿が最初であり、その着眼点も優れていると言える。

第2章では再帰性に関する現行研究の概説とその問題点、そこから浮上する本研究の位置づけを述べている。従来の形態論、統語論の観点からの把握や理解には限度があることの指摘をしている。

第3章では、先行研究などでこれまで指摘されてきた再帰性のあるとされる文について問題点とそれを解決する糸口としてヲ格構文の連語性を取り上げ、丁寧に説明し、最終的に再帰動詞の位置づけを確定している。

第4章ではプロトタイプ論に基づき、再帰性をもつとする他動詞構文の分類を行っている。その際に、従来のような意味的観点だけからの分類ではなく、その観点も重視しつつそれぞれの用法の異なる類型を素性により、初めて詳細な分類の足掛かりを付け、それをプロトタイプの再帰性をもつ他動詞構文とその周辺の他動詞構文を連続体として捉え、イメージスキーマを用いて視覚的に明確にし、その連続体として分類した構文の関係をより鮮明にした。

第5章では病理・生理現象を表す他動詞構文と再帰性の関係を解明するために、まず病理・生理現象を表す他動詞構文の成立要因を考えることになるが、それをさらに支持する関連の「ヲVする」構文とその関連構文などを統語面と意味面から整理した。「ヲVする」構文使用区分は生理現象名詞の性質との関連が非常に強いことを見出した。さらにそれを区分する際の素性の重要性の順序も提示し、従来にない明確な手法でその違いを示した。

第6章は介在性の他動詞構文と再帰性の関係性について議論したものである。「太郎は虫歯を抜いた」のような介在性を表す文には意味的に幅があり、それは何がその原因（その構成している素性）として考えられるのか、再帰性との関連ではどのように位置づけられるのかを示した。結論として介在性の濃淡は〈困難性〉〈技術性〉〈把握性〉が直接的に関係しており、上記例文を介在性のプロトタイプ構文として捉え、それに近接する例文などは周辺的な構文として存在していることを明らかにした。

第7章では再帰性を持つ他動詞構文と一般他動詞構文との関係を図式的にまとめ、双方がどのような関係になっているのかをプロトタイプ論に従って、初めてその位置づけをしたものである。さらに、第6章までに関連のある様々な構文がどのような位置関係にあり、どのように関連しているのかも初めて明確にしたものである。

それぞれの審査員からの本博士論文に対する評価は非常に高く、李静さんのこれまでの研究成果を総括し、更に発展させた内容というべきものである。本論文は、日本語学に対する寄与は大きく、日本語の再帰性のみならず、その関連分野を含めた言語学を大きく進展させた、貢献度の高い論文であり、学位（芸術工学）論文に相応しいものであることを確認した。